土人乃語を白記せしを見しに千載乃今に行く世にめでて生紀盡きぬ其人ら君子乃雅ある山峯乃花にしてめでたき盈らぬも我らが六乃仏れ御談巻説乃昔来ぬ美ら絶さ継きを拾ひ新たなる莵道の園となんつ書き架

寛政壬子初夏

桑揚庵主誌

園老巻説莵道園惣目録

南塘 桑揚庵光 著

第一篇
藤原敦光老樵が劈刀て禱を制せしむる話
第二篇
一徳斎醜婦乃孝道を勧むる話

第三篇

美源二奥州乃芝田次郎を窺話

第四篇

三寸危難を遁て美源二子再會する語

第五篇

紀叓井幽靈の画圖に名誉を得る話

第六篇

和氣清麻呂河伯に巫女を投する話

第七篇

嵯峨の無滿庵鶯と和歌を論する話

第八篇

高野村乃農夫小野毛人の靈魂にあふ話

第九篇

光林房律師緘首を激して味方に扣話

第拾編
大松丸下野判官が本陣を劫し話

以上拾編

園老巻説苑道園第一巻

藤原敦光老獺を劈て襦を製事

夫六畜に物及ひ亀鼉魚鼈草木も久きものハ神皆依憑て能妖怪をなす故に之を五酉と謂五酉とハ五行乃方皆其物有酉ハ老也かるが故に物老时ハ則怪をなすとかやいづれ乃御時にか有けん京家に敦光ときこえし人太宰大弐になされて妻子を倶して筑紫に下て府に到りその大弐の第に住ける敦光にむすめありけり娘常異にして容貌端麗にして和歌乃道をたしなみ絲竹の志しくあくまで好みけりされば掌中の珠といつくしみかしづきける親をよしきのふありしを萬里れおる新玉乃春哉迄へあひ

志らぬ火の筑紫（つくし）ふ亦の草紙（さうし）よのせゑしを住ゐまさ頼乃
まふりもの〻しく大離（おほきなるひな）男れたるしれぬがらあるも多（おほ）かる
中ふ前栽（せんざい）はかりり花洛（みやこ）まさりて殊（こと）ふ広（ひろ）く木立（こだち）そのふゐ
立なえもいえぬさ雅よ気色（けしき）ありて数株（すちう）の梅嘉志り薫り
白ひ紅梁（かうじん）の椿（つばき）微風（びふう）ふ誘（さそ）ハれて汀（みぎは）よちる池の沚往昔（むかし）ハ大泥（おほぬま）よ
てありしをそのひよりか那ぞらを残（のこ）れるをおの（さき）天武（てんむ）み
物好（ものずき）しく庭中（ていちう）よ紀ハ入らぬより常夜姫ハ徒然（とぜん）あるまゝ
よ簾（すだれ）を半捲（なかば）させて端（はし）ちかう居ずのひ琴（こと）ひきなし
おりしなるよ柴垣越（しばがきごし）よ人の音のひするを訝（いぶか）りてまひ誰（たそ）や
あるとなし見ぬをまちし人小萩（こはぎ）なるそのよしを答おろ
させて翁（かう）と宮（のは）ふ小萩（こはぎ）のふ慧（ちゑ）をのまそて庭よおり立ちれば

年ハ十四（じふし）ばかりなる少女の嬋妍（あでやか）なるが花山吹（はなやまぶき）の袿衣（うちぎぬ）よ毋と彼（むさく）ハ
奴袴（さしぬき）したるが垣（かき）よ手をまかせてそのり小萩ちかくよりて
君ハいづちの方よりて通謁（あんない）もし太夫ハ只矢哉方（あやしきかた）よりとそら
せ給ふぞと問ふ見醜（おもはゆ）げ小童（こわらハ）ハ宮（こう）ちかき鶴園の大徒（ひとり）の許（し）
許（もと）ふ名をハ萬（めげそ）ふとめされて仕（つか）へひとのまそしたるふしも師の作
言傳（ごとづて）りて長閑（のどか）の辺へまかりてかへるさ此殿（このとの）のまへよりを通りけり
此琴の音のおもしろきこえひがあまりふ懐（なつか）しく木立（こだち）の茂（しげみ）を縁（つた）ひ
不意（ゆくりなく）おもかれ来たる童（わらハ）が罪（つみ）を許しまひ
をもうけまつるとのたまへば世の雑主恩恵（おくさまめぐみ）よなそてあれと
申へあるさ身ふきこえ冬れも小萩も情（なさけ）をしらぬ身ならひおもかげく
これ優美（やさしき）ゆくよりつるゝせのひ殊よ納おいしてちかき精舎（ことし）

よ任せまふ法者なれバ、ここに聞へひでたるものを撰みてのちハ、いど姫にもよきさまにきこえまゐらせんとりさるへバ兒の辞する也もなく嫗を胡蝶れやうに踊越小萩につゞく入まゐらす小萩志がれ坐をやせば姫へすゝめ奥さ夜より入あひ画屏を隔て詞優に報まそひらつふらん光へさもひしを寂莫れまさらりとのよまぬし待るまでまて爬搔のんやでばあてみて待るを求めきこえさせのふるれ恥さはよし小萩を以てのあふ茂葉一礼し起く云やうおもある彦山まて唐人の縁へしをは待りて後絶て久しき松風にめぐるあふ去乃ありてさるを予此賢す今の世にきこえぬ筋をひきつけ手をとひ唐め絶由の孤弥すましおふに自流も偶まれい

君よ蔡邕伯牙が巧術ありともらうへふ蔡琰鍾子期が識者なければ本意なくおもひて戴逵が琴を破せし意し志よ效ひまふもさる事ながら今一曲憐みてと狩衣の袖引つくろへバ姫ハいとゞ羞屈ふて弾まへれバ小萩ハ興あるをひ慰やかて献れ間よ瓶子土器をとりてそゞろ進めれも茂葉琴意を謝し土器を挙るばかりまて盃ばかりても飲ば小姫一つの酒器をひきよせ何の餐へあくんへ小萩もたまハ添ハ乃漢文れてやきて珍らしとて来ふまいるせし繕よ待るとまだ指を年奥をさし出ハ茂葉か学まうけて庭上に趣り池辺の石に上て太虚を仰で額く姫も小萩もさるハ茂葉叙上にかへして詞を

巧てさへやう行ひすましゝ聖に仕ふ身はあまたの戒をおかさゞるはなし小萩閑情のまゝ初おかせず悼するあらじ少しまゐらせしを法仏につかへまつる身ながらも賢さに殺生飲酒の戒の三をかしぬ身の不犯をせしとりへ僅にぞけるらん人はいつぞかは色になるてふる此ならん是は我身の悪き邪婬をさへおかしたれば妄は五百世手なきの子生れん邪のおそろしさよかゝる身ながら我が歳業を佩言する面なきに少童は三尓の駆烏沙弥までまうでて剃髪もまだしく今日の學情を一厭ひ僻事にゆく一時不良の心を発し去悪数回傾け躬の限を盡し紅顔に酒の気をさして姫の方にむか向ひさし絶に琴弾かふ美貌を物蔭より見たてまつりて

てむ彼像山のむかしからちさいぎ大塚彼山の子規の鳴る思ひをならせまつりける時もありて荒津の磯の波枕ちらちよけるならしもかなすやほぐるゝ落ちまよひでて目をまつて情をよぶれだ姫も小萩も互にあて是は信鹿を出し我身なれは努力かる不良の心はあらねど遍くことへあまてまつりしるの悪さもと云ひよらぬさまなりしへは我業の法にして秋備て乾き邑地の常花も君がためにゑをむかへ荊棘林に優曇華を生ぜしらでちらし待ちて四くらへあるも現世なりぬるまて病世の契とおぼし身をまかせ小舟をかぬらばらうて是の海の筆跡のまゝめざす香椎の浦の紅矣夕葉の岸乃老ゝしの松の紀をもとなりておほしくとせちなきこゝろ

されば姫はさのみなげけれ然るにいひ消がごとく且は驚き在り
入るまゝ風雛をよしなき會面に闘弱なるんを動さ
せし罪も、まさらしく詠ずるならんと一首此古歌を
よひける

常世へは住べきことのを継ぎたち家がからおもやけ君

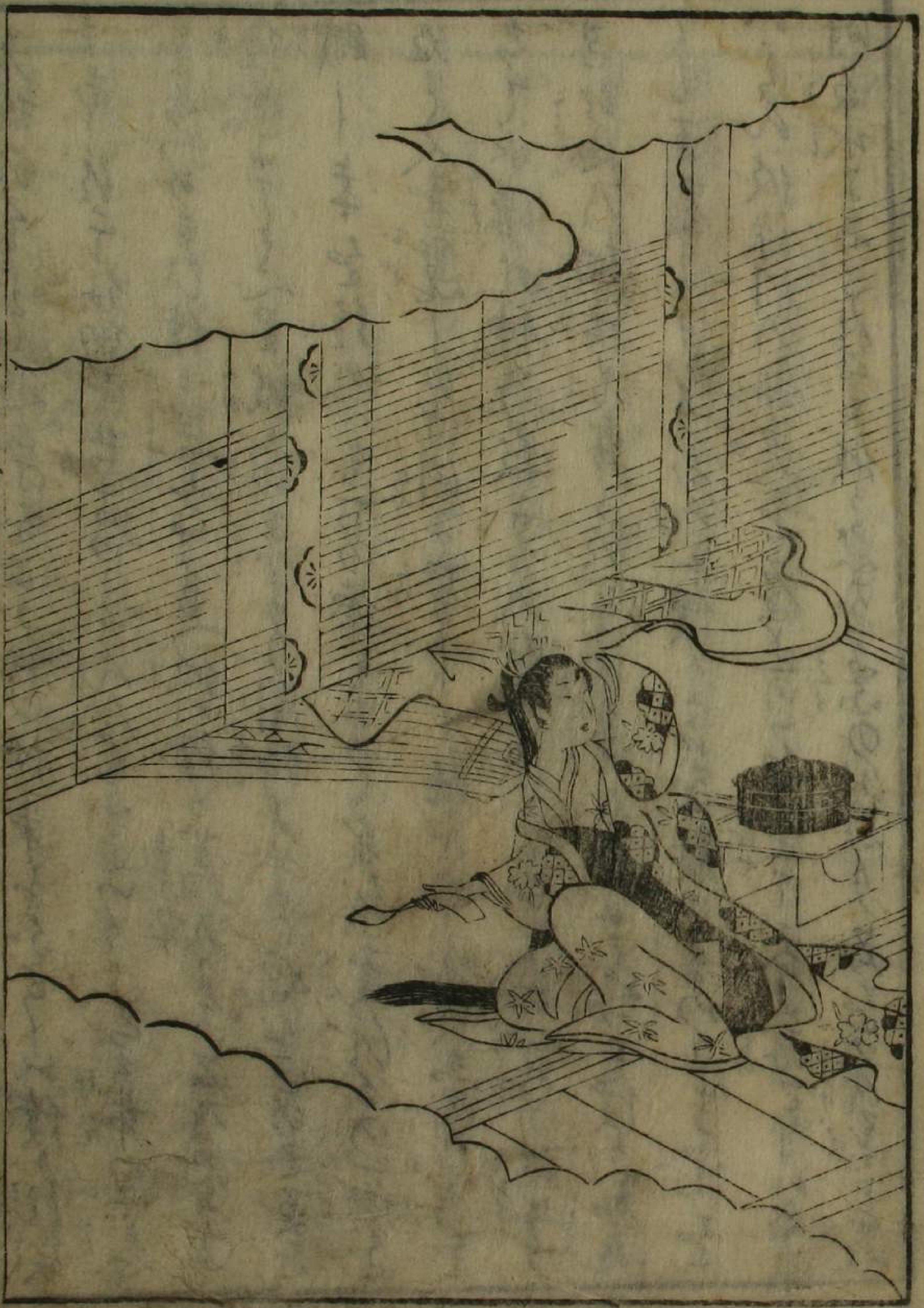
書跡つらく小蘇はまれとさしかざせねへば毅然
動より讀ならずこと一声ふして眼中に血をそゝぎ瞳光
肝をつらぬくばかり非晩猛火れなく妄作て異首此
忽ち悪鬼の如き撃をなり乱し狩衣摚投なりて遍身
白汁れ毛さかだち声を發てしやり見なくも誹戲さら
よりく此根を鞭んでおく鱼きから踊からし形勢

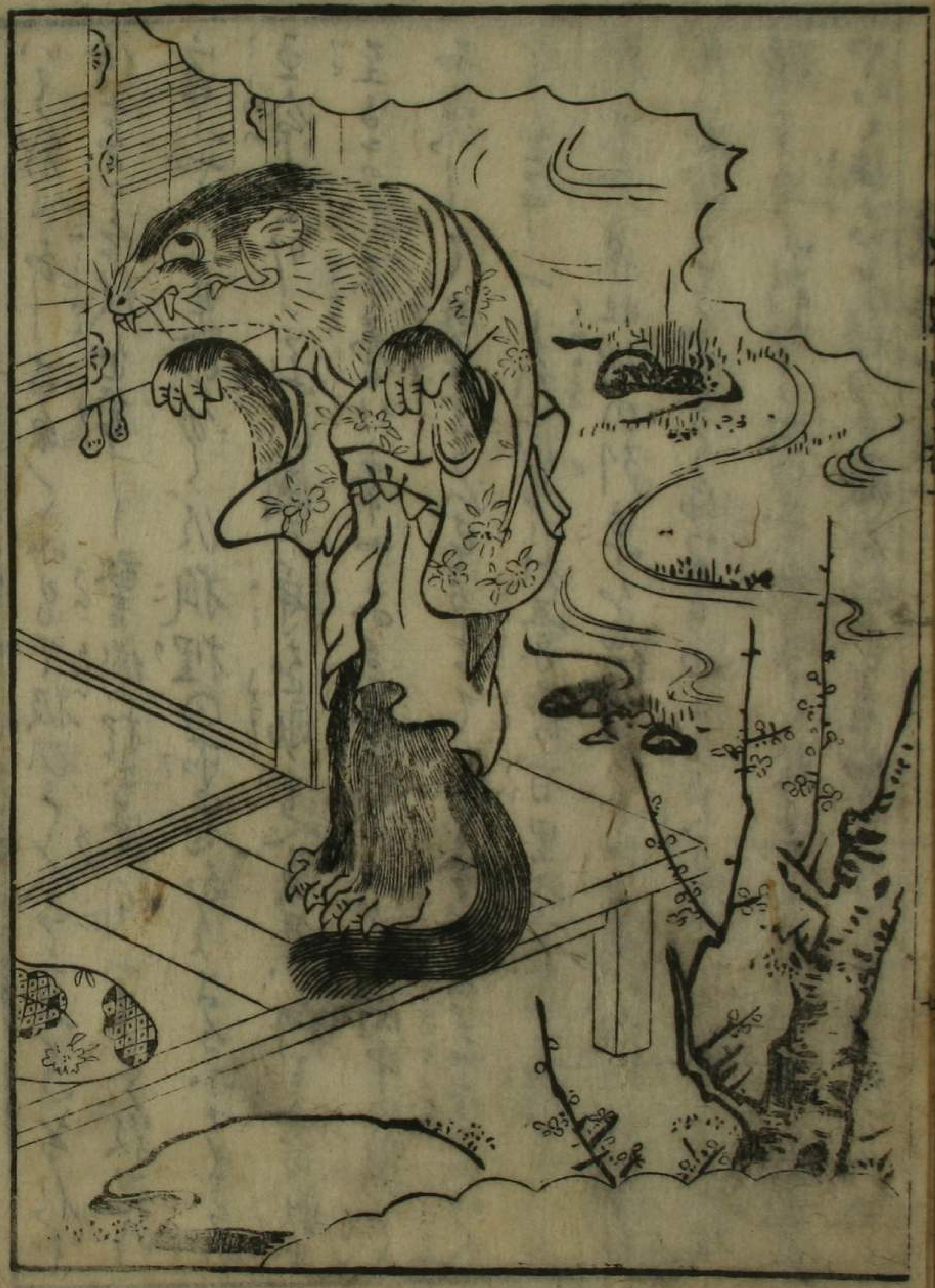
小姫も小蘇も魂消ひあつと叫て殪れ仆れたるのまゝに絶
敦光は侍女等一称に慌て跪出されば二人が面は蒼ざ此
てくありて絶死ならねばいかゞのそ呼採かさき呼醒なく
ども空文冷くとして轉氣なし　敦光こころつきこれは
魘死せるなり前よりかゞつき呼すあれどもそでめあのひ
足の踵と大梅指の甲れ岩を咬しめて皂乃末をとり
いでて鼻中に吹入ればしばし方絶として微温精氣なれど
徐に喉ひのうふに忽然と回生したるばはじめて安堵し
まづけて寝室に移し粥も湯夜をすゝめんと静かに
保養し暈死なる仔細をといのへは小蘇方絶眼
ひらき姫後を語るに人くく面をみ合はせ怪異の

さをりふしハ敦光がもとにこれら数〳〵の怪事ありて[illegible]
やませんずる験者に禳禱やませんと低徊思しけるに
折から門衛の者趣来て門外に一老翁ありて流儀
怪事を除きまゐらせんとあまりするよしを啓上す
敦光欣然としてこれ希に幸ひの賓客なりと[illegible]
を拂ふて高座に請しこれ相貌をみれバ優[illegible]
おぼしくて八旬あまりの翁乃白髪皓〻としてそのさまハ
香染の荒き衣を着したり敦光一礼終りて怪事の
仔細を語りこれを除乃術をとふに翁いはく異道ハ
もとより古郷を離て情を脱し累哉捐て師友を尋訪
法をもとめ悟を證せんとあまねく天下に行脚し
適〻海道に錫をめぐらし此の第外を過るに此
怪事を聞つゝ尊庭これを除ん秘符あつまりて子
おもて公に禍ひを退金口のごとく述れバ敦光夫婦
感激しつゝ心肝を謝し対晩境にやどらへハ觴を執て
姫の臥房に誘ふ翁侍士乃守厳なるを銚笑してハ
嶮〻しき宿直のかれ鬪哉異道かくのごとき上ハ翁易れ
秘密の神呪を授まゐらせんこれハ片刻退るといふ
に敦光もはじめ翁が詞に安堵し隣室に避て待居
しけへ姫ハふるき一霊に力めて側に小姫をめして終
に呪詞をとなへ翁人乃退るを窺ひ姫乃手を
とりて離うち守天にわらくは我ハ比翼の鳥とならん地に

あらば我ハ連理の枝ともなりなん君が黒髪にてよれる縷(つな)にハ大象もつながる㕝し君がはける履(あしご)にて作れる笛にハ鹿もよるべし禽獣虫魚(きんぢうちうぎよ)も人を恋(こひ)ざらんや文奏(そう)せざらんや君かためにしもこれを陋(いや)しめたまふなと言係へハ姫ハ身をふるひくそしのけれハ翁をさひるに先のも繳(こう)さるにハ父も思(いと)ふ君れ意(こゝろ)に叶(かな)ふまでハ傭とまり俗(ぞく)となりてもまつらんとのを天と言へるに比久(ひさし)くなも画る胡(ご)ハあらんの根ハ綿(めん)くとして絶(え)まじと今ハこゝろへバ懐(やどり)つけいあつと一寺に入なふに聴るさすれやと剃入(かけいり)それハ今返誦経(きやう)乃音しておつとつる翁れハちかきん手姿をみれバ姫も小藉もくみ酔るべくあさましさ

いちんかとおしさ多くふもて扱ひかゝ人もちうきまはれず侍きる兵仗(ひやうぢやう)を帯し警固(けいご)おも堅固にしく敦光乃宜ふやう是かなりバ狐狸(こり)の所為(わざ)ありさるふてきこれ王命(わうめい)をかしこみ此國乃守を助(たすけ)まゝる身に何ぞ禽獣に至るまで不奉仕(まつろはざる)事やあるべきよしく国中の隈(くま)くを捜(さぐ)して塵(みぢん)ふせんぜるとて軈(やが)て郎党(らうとう)若党(こくとう)雑人(ざうにん)筈を石しつとひ国中れ豪家長者里乃父老(ふらう)子解流し猟犬を集壮雄(ちやうゆう)の列卒(せこ)を借しのふ夜ハ姫の臥房に かくおいしてくまぐく守らするに三更(さんかう)るたびまつりに睡眠(すいめん)催しある折から一ツの老狐(らうこ)まく枕ちかく蹲踞(うづくまり)鼓光(こくわう)やゝも姫が(えん)しを浴つる歟あれと美人子弓に矢つがひあへず





老狐虬として過ぬるに翁が鉤に挂事をなせしは僕が類族
にありし浜千仔細を告まいらせんためにまいりしなり希は志
をとげめたまひ僕が言をきゝたまへ彼は僕が舊友にて此池にす
經棲てあるへし彼が性素より闇弱にして婬をこのみ奥を
賊し年を経ひても一ツの徳もなく身を変ずるの一術を
好て人を驚しは深淵に蟄して徒を遠ざかるは天帝乃憐を
忘て水澤氏神乃教にも入ぬ魚きにまさへ神龍に踪せら
れは海乃栖居もならずして園中乃池にすむへ里僕が知ル
ても百歳にもなりなんと僕が言を疑ひあつかふ説を
いたさん彼染川の鮎魚を庵上の屋に上て天を拜せしは今
時を水にありて彼が魚を遠ざの時なり名を蒙魚とよぶ

魚の肝は一月に一葉つつ十二月に十二葉をかさねは佛教を経て
肝葉に茂をもって僕に常に茂葉を喰ひは彼姫乃美貌
に逢ひ見とありてあまをひかるを姫は受戒せし兒乃
なるき心にも入魚き身がかまれ猿ひを貝皮袋とよぶ捨も
やうに於煩悩乃綱に係れ教をやぶれるは鈍なるものぞと万葉
集の蒲鵺の子をよめる古歌を思ひいづる純やは君と添さ
せるひしを性れ純に依れいそのヲ死かゝく旅翁の風流士とい
棲は魚は飯に喰あふ祖にもそのひ教ひと後人乃
僻事書れしよりは強ておのがるゝと思ひするなるへし石川
郎女が大伴田主容姿佳艶なるに雙柄の威をぬし書
を寄るに良伝なれは醜嘔に似せて東鄰の貧女の

を取に来れりと詐しに田主も念に任せ火を取て帰せし
かば神女が契を果ざるを恨てよめる遊士と吾はきける
を屋戸かさず吾をかへせり於曽の風流士とよめりこれみや
びとなりしぞんやまもとく情も深かりなんを択ばずなひて
許つるを乞ひたかりでいさゝかなりしはふきみやび人
にといへるにて於曽は鈍なり顔叔子が鄰家の嫠婦に
燭を執しめて且に放て魯の男子の鄰家乃嫠婦を
納ざるなども事に似る迫するあるに後世の好ものひが
事を学びてやなもまりたれきを訓じ撒のるのあらし
いれるを彼はおのがるを娼れさとまなひしよと愧て
かゝる振舞いしはせしとの人僕鄰寄る友を戒人乃

儀を恥らへども彼が連累となりて親属をもけがさん
事乃悲くまへれバ告なやみけり彼も年経て変化乃
術を妨るなどのおそれハ容易にハ依まじ彼が如き小
長忌乃黄耳を思ひ黄耳ハ四足の駿犬にして牙あり
とのあり云幸ひに獵犬をめしかふかなきよらハ一ッ太
四手乃逸物あるべし沈水を乾しかけたまゝ仔細なく、
獲すべし僕が言を尽幾ハ疑ひのふなと云ふなと
思へハ曉鶏一声夢をやぶりて敦光忽然と眼を開き
希代の夢想乱謬や千歳の狐神もあり親属乃嘆
見せまり己が生失を夢を深く許しきを神妙なりき
古猫乃妖を逐るに女子変化せしもの幽冥録なをよへ

されバ疑ふにおよバじと下司をめして擁犬やまかりける
かゝへひかへハ國中此村里より数を込て引来りけり
とかくする程に数多犬此に立出るまへハ國中此犬数百
ひきたる中に御笠乃長岳より引る一犬耳に黄毛お
ひて遍身白毛銀のごとくあくまで肥ふとり猛しきさま
眼を瞋てぞ立たる頭大圓を開口を低匍匐し敵て
動かねバ數光いたく是黄耳駿犬なり其擁のかげ疑ふ
あらじとはじめて装をかくる里数人を率ひて此辺へ
うち出下紐を下しけるに健なる農夫を選らせけれバ
深き此水と云ども十刻の内に汲ほしても其此下ならへ
まは假山乃下へ横さまにあやしき谽谺空大なる洞
窟あるはさこそ其妖乃栖居なりと枯木を集て火を焚責
けれバ一霎時あるとひさしく窟中より白氣立のぼり此辺に
臭霧を天を覆ひしてく騰るは其大いなるよとみるうち
双眼猛光を放ち痩たる牡牛に彩しき其妖おどり
出るをすハ哉と犬どもきほひかゝれども其妖は事ともせず睚らし足を蹴
伏人に向ひ瞳をかゝる黄耳すかさず其妖の後足を挑
吭とおぼしき所をさとかに噬ひて危く人と立
騒ぐど白氣悪臭りしく毒をつらぬきもてみる所に
數光か放てる毒を矢の根にぬりて射ちけるはかりしきはり
ひやうどもあて其あやまたず妖ろ頂をつらぬいぬいより
射られてたふれしを其が所を伏ひて郎等起乱れ人て

こよりまなぶことに志をとゞめ給ひしハ敦光怡悦斜ならず依く
是を労ひ黄耳の駿犬なるをまたく賞讃しなおく度に
つながれて養置きよし人々にもろく契りまうひやがて其
樹の皮を剥せ後代乃話柄にせんとて標に製しあふけ
波激水ある時ハ毛起激水去時ハ毛伏により汐潮の礒
と称して寺に安せしめ給ひしとかや今に傳へり

一徳称醜婦に孝道を勸る事

元仁の始鎌倉乃執権平義時物故て後二位禅尼乃計ひとして武州泰時将軍を経て後見として叉へるれハ義時乃後室弟伊賀光宗等謀に心を合せ宰相中將藤原實雅卿ハ三浦義村が聟たるを以て鎌倉の主にすゝめ泰時を失ひ義時当腹乃子政村を執権にせんと謀りしハ鎌倉中その沙汰かしく近國の武士等群集し此事禅尼安からず思召し義村が許にいたりまのひ對面有てはほどの密事風聞かくれなし早く政村泰時が家人へ和平乃謀を加へ光宗等を制禁ある所きよしありけれハ義村畏り後室光宗等に諷諌し騒動漸やく静まりて泰時素より寛仁にして舎弟政村等にいさゝかも恨んなき故義時の遺跡莊園をわかちあたふ附肥饒の地をバことごとく連枝にあたへあひ執権を承りる身ハさしで所領ハ豊ならず
よしかて磽确の白田ありしを取まへハ禅尼をはじめ

一族も是を稱誉し權威おのづから高く輝き風化大に行れ天下安寧なりといへども ありける冬雪下れ街に一老醫ありて自ら一徳齋と号し肆頭に瘰癧治病の文字を書したる小幟を建て其部鄙の未だ織来住の旅客見ることのなかりし覩ものおほし一月市中に綿を繍ふ女のありけるが これ招牌を見て疑ひやがて通謁をとげて輔はつて攖うちかけ云やう婢は此頃まで近き農夫の娘にて侍るが生れ出てかかる病のありしより此醫療を加へけれども其小愈もなくいかなる醫家の妙術にても全くいゆることを得ず婢が身の幸ひこれによりてとてもとぞ頭に纏ひしる布をとりては鼻ありもなくただ口のみ顔に生えのかきまつ一面にして恰も紅蓮花のごとし老醫見て其顔鼻なきを婦人患を病ゆらして人に適ざるを愁ふる故女ここに汗して云やう婢不幸にして女と生れましても異相の病侍る故現世ならぬ罪ありやと思ひなしてくれへども村里などの婢がおりそこなへる家に山人の赤き木の実を教へておそはるやうなる混名をつけてたへず婢がひがむを恥しき人に何ゆゑ遂に嫁は父醜きとの生まるるをあやまられやうに思ひなやみ果中より價なき菜を婢がためにし貰ひしのふと安うえへしことは見て耕しのわたり少なしをさへるに忍びし婢が蒭蕘が力ともなる且夕の烟をたつるにたらむ桐惑の聲婿となればかかる片羽ある身を蛇麻のやうに人にまずされて破瓜年もゆるし繼と世の中に衰れにさしえ

なまじひに醫をまなぶといへども人少き時ハ父母を慕ふことを好むことを知る時ハ少艾を慕ふ大孝ハ身を終るまで父母を慕ふといへる婦人かならずしも美貌ならずしてもやむすめなれ褒姒が笑周室を傾け楊妃が國色も馬嵬驛に白骨を晒しぬ不幸翠を以て自残ひ丹ハ之を含く肌を磨くの類これ皆美を以て病とせり父母に孝順をつくし農桑紡績におこたらざる婦徳をもる時ハ天なるかな福を婦人にあたへ佳壻を迎へすふるのうれひなし其時にあたりて病ハ全く愈ゆめ好色富貴も憂を解にたらず惟父母に順て憂を解べし又本の字ある混名を負るも隣績の橋を惜よし志多くをしよして是父母を養ふ一ッの要なりとねんごろにはとし

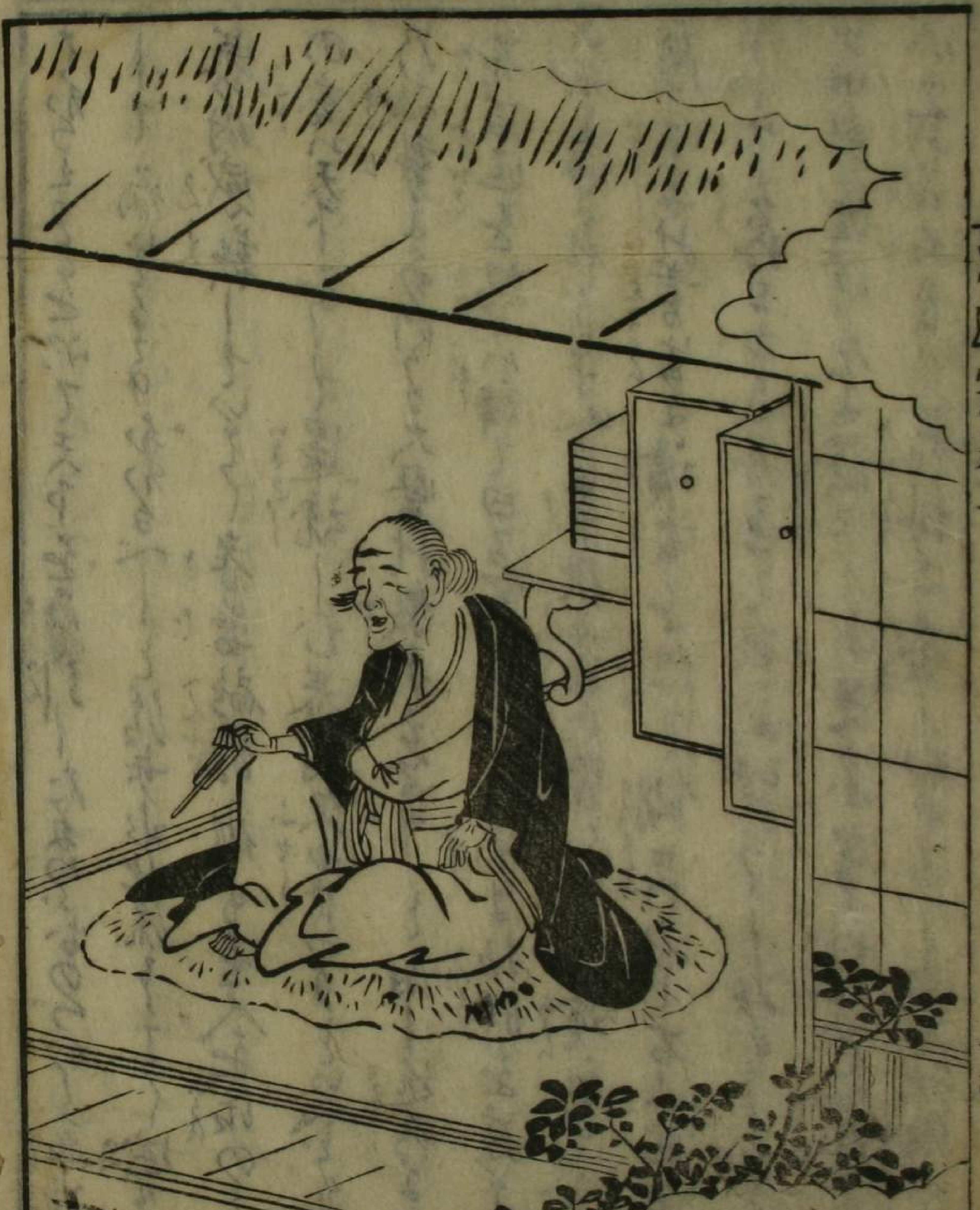
一 是ハ女醫業として大醫の教示にもとづく沈病に因ミの愁眉をひらき慶を謝してやがて御るたげまづ診脈針灸方技にかゝれバ經術に傳て得失を云ひ乃子といふハ孝に依り人の弟といふハ順に依人臣といふハ忠により各勢に因て邇く不善を以てハあらずして名を阡陌につ泰時か文なし鉄に請し自諂しかひけれハ其醫の精術を賣り實に疾病に方技を用ゆる子にあらざれバ醫にして醫なる称の寄怪なるもあらぬ醫警を頼してさんけん是非のために死に到るるひを救ひハ名方伎ハ世上に数多ひありふへしまた遇待に及ハえハ拙術をも悩壯健にして不い善病あるもの湯液及びるに施しけるに泰時日其國の言善なるは孤

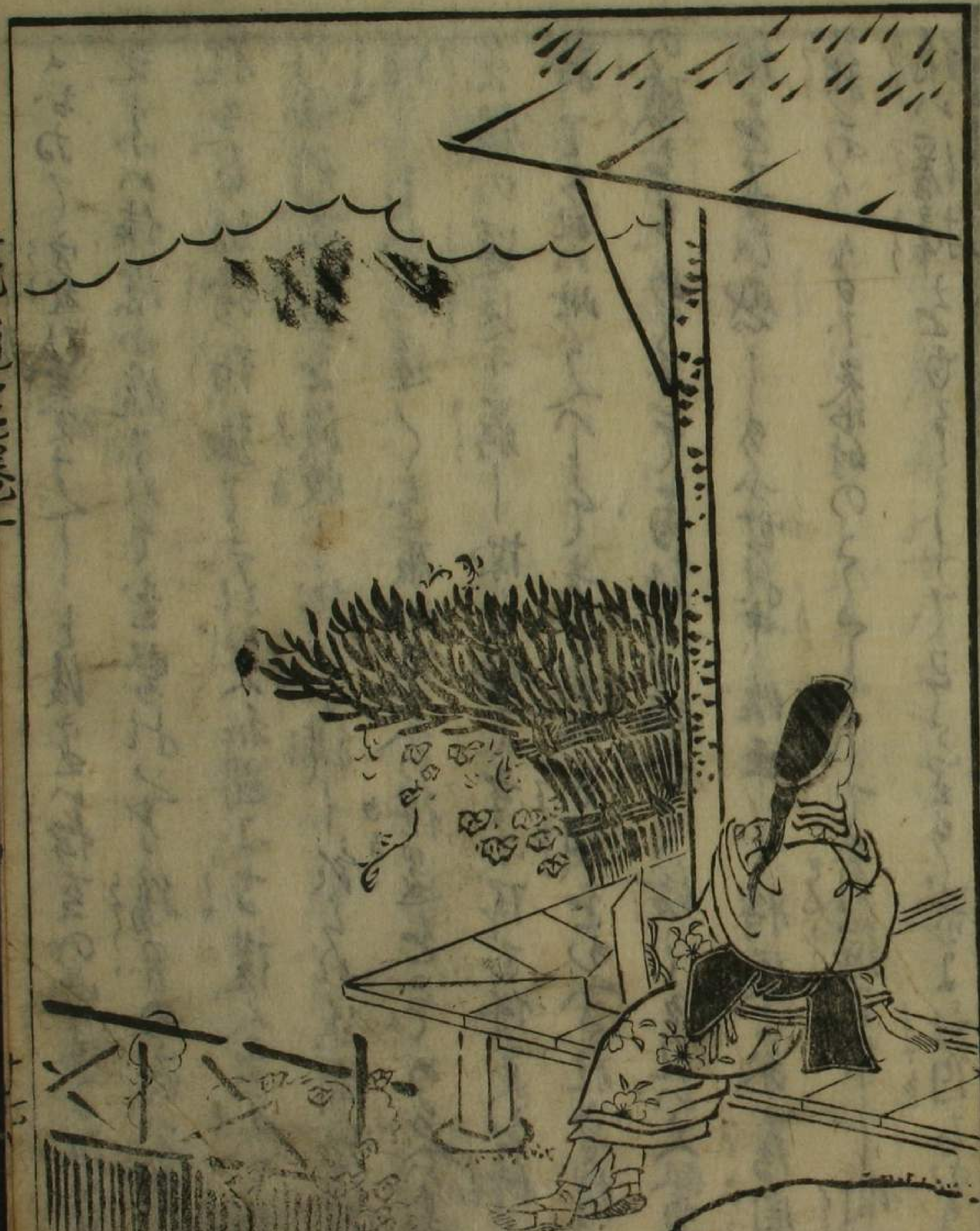
何ん有哉否哉子時醫すゝみ席を進て曰君今ノ病篤し一族の世人ハ腸胃の病なりて既に尾閭の一言にも安後すべし
ともに全敗ともいふ無かりしハ再ひ療治を加へなくハ鍼を歯の根あらんと憚るをなくいひ出れども近臣まて面をみて合席上に在ゆふ之ある中に末座の侍士ひとりかくとすゝみよりて庸醫何をかみだりに此言を出せしや下に居て上を訕る千罪死にあたれつまし罵ハ老醫寛宗として足下沈思寛容するをあらさハさるハ是短慮といへる病之是ある言を聞え河潤九里漸洳三百歩といふすあり今縁合に依太事あれも禍衆庶に及ぶ是豈獨あんぞ逃るゝ不あらんと思し目にみえやまされば泰時少し匡座ひ一面の傍論ハ弱少に非るまであらばやを吐し是へハ面をたるまく敬屈ならば

綱を縁りして大醫弱年の不徳を心底にあらためたまハゞ泰時か病を治としまへとあまねく是を世々の饒舌あらばとゝも君の病をとるに悪ハ此ハ奈良の衆徒等が公家を根なる中にて蜂起し既に六波羅よりすかしきこえたれども後んせざるよし是國家の病にあらずや何ぞ速に療治を加へたまハざるや泰時曰大醫治平の術あつてや醫のいふ一計あり南都乃衆徒等が三陽五會へ鍼砭しまへとぞ泰時其理をとふ醫のいはく興福寺領を押へたまハゞ悪僧退散すべしかひなしといふ泰時嘉くん其の一計と符合しされば大に賞賞し醫慨然として歎て曰南都比叡の僧徒等やゝもすれば我々の濫訴をくハだて神輿を振て帝都を騒がしまゐらする

病根をいやさる用捨の時ゟ仏法をもてもまもれかし代ゝ其常乃信じあふよるゝ釈氏の教強にあまりしとなすまもあらし放かく渇仰のあまりて無益の大伽藍を建るなども一國の費大にして安民の便ならず現世安穏とは何をいふならん世を治め従者眷属をもまもるを現世安楽ともいふべし是ハ國家の棟梁たる君其けんある君まさる我国乃宗廟大神宮をも小社となし茅葺にして質素なるを示し給ふ今関東乃武家人謙倹の志乃めんく奇物を翫びあひ新渡の唐物に價の貴きを厭ひなくおのつから百姓に誅斂をなりく近年にいたる欲はまても君ハ仁恵をほどこし大人の旅遺跡を失ひ諸弟に配なしあふ足盈を悪なふ八溢之姦とものふ道し利禄を求むる輩ハ其身を害せば理政安民乃

さかりまを以て天下を寧らしたまへばおのづから血脉流通して病生ずるのなかるべしと清兵衛此流をよく述ければ泰時感歎してよく耆婆扁鵲が術も壱人を活すの大醫の言ハ天下をいかして還魂しむ泰時不肖なりといへども当家乃政務にあづかる大醫乃教示忘まじと謝し近侍に命じて布百匹を贈らる辞して曰予素より此術に招牌を建て術を鬻ぐに似たれどもすべて草根丹砂の費なければ價をとらず近隣二三子の書生に讀書を授て餬口のみと布一匹をかへうして去ぬ日ゆき月をへて故ありし時のつゝしみもなさざりし泰時二位禅尼に議して光宗等が奸謀を糺し卿相以上ハ左右なく罪科に處しがたしと実雅卿ハ京都





にあたて家統ひ絶なんとし後室は伊豆の北條に押領使なり光宗は信濃に流されて其賢なる者驕胃の病は益盛なり程も南都騒動静まされは大和國に守護人を居て衆徒の知行荘園を没収し地頭に補し詔られ近國の御家人を催し南都の道々を取切て人の往還をとゞめられけれは衆徒は兵粮の運送に窮し械を捨て寺に帰て佛事を修して静まりぬれは此ゆへ人々よりて寺家の所領をかへされ守護地頭の職をとゞめ玉て南都の病全く復しぬれは大醫の妙術を施し感しあふ世の中治平し将軍家鶴岡御参詣ありけるに泰時のさるとして前駈に令し閭里路傍は灑掃をせさしめて見るまゝに清ちかき松

樹の邊より出農家の女乃牛を牽て出來りけるが泰時の馬前ちかく行かゝりしか牛を控へて跪く此時は如月の中旬なれば牛喘ぎて舌を吐泰時これをみ給ひ此牛何ゆゑ辛苦せるやいかに猶乃気を喘るやと問せ玉ふに牛を控へし女はいへらく今春におゐては少陽事を用る時はさまで大に熱すべからざるに時氣節を失ひ暑を見ひて牛乃喘やと思召して此ほとひは我君は謀に天下を補佐給ひ陰陽調和せる事を典とり是は時氣節を失ひ恐らくは傷害せんとするならんと深く憂ひ玉ふはありかたき恵なりてまし侯は娘が牽る牛はさらくさまではなく彼貧女星を戴て家を出今午時まで荒小田を

耕し粮の時におくれて人ハ牛のごとくなれバ男女もともにすぐれ
は馬牛ほすくなきをおほして人乃すぐくハおぼさるや富人
の稼ハたゞ田をすしくて多くを食ひて餘る千田をもして
多くれハ更に休めて地力をまたはかりて食ひて餘ある
時ハ種る事常に時を後らしてこれを斂るに熟をよび
はかるがゆへに富人乃稼ハ常に実のして粃なく実多し
久く蓄て腐ルゆへ婢僕子らつかに三日寸田を耕すれバ
日数によれを畢田器をあつることをもしたすれバ地力竭
きまゝを斂るにおよばれまゝにを熟をまちかね是より先なく稼お
らんやよき牛あらんやと云ふ泰時成ひ貧女ありと
圃をもとてこもる名をとひ圃老ぎ踊して実の名ハ
何と思ひハや村裏常にこれを屈にせらびるとひてはたいつと
なく貌もさよびハ女すてこそは丈夫もおよばさる農業
をつかまりまする父母を養ひ世にも稀なる孝順なるゆへ
よし巨細遊へられも泰時さし無くありつしめ女が今此荅へ
より宣ひ将軍流所へ遷御の後此よしを啓しあひ較て
本実親子を召れて讃美あり金帛あまた賜りければ
近隣にも名誉を称し聘せんと争ふ者ある中にも
優越乃何某とかやいへる鉅富乃農家より佳婿をえ
とまて父母の家をおこしける此時年ハ貞永のはじめ
泰時成敗式目五十條を定らるかれを医やあると法橋
會全等に命じて求めしまゝる日小書此下の録を関て

いつち行きんとふつに及べれかの驥もして千里の馬なるを
をもつぱら執吏に伯楽の識ありて名士をあげて官を授
此武門をさぶめしるをまや滄海公の律令に准ずべきとのう
これ関東の鴻宝天下此政務これに随ひ附ハ官人に私曲なく
下に怨訴怨讐乃人なく仁譲廉義の軌範國家安泰
乃宝典ありけらし

圃老巷説菟道園第一巻終

五口